

早稲田大学
の
画
平
日

Exploring the Kaleidoscopic World of an Innovative Nihonga Painter

NAKAJIMA KIYOSHI
RETROSPECTIVE

横浜発 おもしろい 画家



NAKAJIMA KIYOSHI
RETROSPECTIVE

中島清之
日本画の迷宮

Exploring the Kaleidoscopic World of an Innovative Nihonga Painter

2015.11.3 (火) (祝) → 2016.1.11 (月) (祝)

休館日：木曜および2015年12月29日(火)～2016年1月2日(土)

開館時間：10:00～18:00 (入館は17:30まで) ※11月3日は観覧料無料

Closed on Thursdays, Dec. 29-Jan. 2 Hours 10:00-18:00 (Last admission at 17:30) ※Free admission on Nov.3

観覧料：一般1,200 (1,000/1,100)円 / 大学・高校生800 (700/700)円 / 中学生400 (300/300)円 / 小学生以下無料 / 65歳以上1,100円 (要証明書、美術館発行用紙でのみ対応)

※()内は市営バス/乗車20名以上の団体料金(団体予約制) ※お申込先へアクセス (2枚1組 1,800円)は、2015年7月10日～9月23日、横浜美術館ミュージアムショップ、スマートフォン・チケット「チケットシー」、「セブンチケット」にて限定販売! ※開館日は2015年9月29日より11月2日まで販売主催：横浜美術館(公益財団法人横浜市民協賛文化財団)、神奈川新聞社、tvk(テレビ神奈川) 後援：横浜市 助成：公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団 協力：みなとみらい緑、横浜ケーブルビジョン、P&Gコハマ、日経英漢辞書株式会社



横浜美術館
Yokohama Museum of Art

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1
3-4-1 Minatomirai, Nishi-ku, Yokohama
220-0012 JAPAN
Tel. 045-221-0300
<http://yokohama.art.museum>

横浜発 おもしろい 画家

横浜発 おもしろい画家
中島清之 日本画の迷宮

NAKAJIMA Kiyoshi Retrospective:

Exploring the Kaleidoscopic World of an Innovative Nihonga Painter

2015年11月3日(火・祝) - 2016年1月11日(月・祝)



横浜美術館



《花に寄る猫》
1934（昭和9）年
個人蔵（大佛次郎旧蔵）

大正・昭和の激動の時代。型に嵌らない、しなやかな感性で、 「日本画」に挑み続けた画家がいた——。

明治・大正・昭和の激動の時代に、横浜に生きた画家、中島清之^{なかじま きよし} [1899（明治32）年～1989（平成元）年]。片岡球子の師として、あるいは、今日活躍する日本画家・中島千波^{ちなみ}の父として、その名を知る人もあるかもしれません。

1915（大正4）年、画家を目指して16歳で京都から横浜に出てきた清之は、外国人が行き交い、舶来の珍しい品々が店先に並ぶ港町の進取の気風に、大きな刺激を受けました。会社勤めをしながら、休日は東京の松本楓湖^{まつもと ふうこ}の画塾で伝統的な模写を学び、早朝や深夜に制作に勤しみ、25歳で再興第11回日本美術院展覧会（院展）に初入選を果たします。

以降4度の日本美術院賞を受賞、後に同人として活躍しますが、豊かな才気と旺盛な好奇心はとどまるところを知らず、83歳で病に伏すまで、生き生きとした作品世界を展開しました。

清之は、一見すると同じ画家とは思われないほど、常に新しい様式と手法に挑戦しつづけたことから、「変転の画家」と評されました。そのために「焦点が定まらない」といった厳しい批評を受けることもありました。自由奔放で、型に嵌^{はま}らない作品群は、中島清之という作家像の焦点を絞り込もうとする鑑賞者を惑わせ、まるで「迷宮」に誘い込むかのような魅力を備えています。

寺社建築や仏像、古典芸能などの伝統美を精緻な描写で追求する一方で、モダンな都市の様相や現代風俗を軽妙洒脱に描き、時には抽象美術の手法も作品に採り入れることで、「いつも古いものと新しいものの反復作用を繰り返してきた」と、清之は語っています。鍛錬された技術にしばられることなく、古典とモダニズムの間を自在に行き来し、それらを見事に統合させた清之の芸術は、溢れんばかりの創造のエネルギーに満ち、観る人の心をつかみます。

本展は、中島清之の16年ぶり（横浜では22年ぶり）の回顧展です。初公開作品、さらに画稿やスケッチを含む約180点を展覧し、青年期から最晩年に至る清之の画業をたどり、主題や技法への関心のありようとその変遷を探ります。大正から戦前・戦後の昭和という、社会や価値観が大きく変容する時代の中で、一見激しい作風の変化を示しながら、清之が貫いた思想や美意識はどういったものであったのか、編年的な構成により掘り下げていきます。

なかしま きよし

中島清之 ってどんな画家？

1899 (明治32) 年 京都に生まれる

1989 (平成元) 年 横浜にて没



アトリエにて。71歳頃。

激動の時代、 逆らわず、流されず。

90年に及ぶ中島清之の画家人生は、大きく揺れ動く時代の波とともにありました。関東大震災、日中戦争、太平洋戦争、戦後の高度経済成長一。明治、大正、昭和、平成と4つの時代を生きました。関東大震災後に西洋文化の発信地として発展した銀座の街並を生き生きと描き、70年代にはカラーテレビに映る流行歌手という日本画らしからぬモチーフで大作に取り組んだように、清之は激動の時代にいつものなやかに寄り添いながら、時代の空気を吸収し、新しい画風を次々と生み出し続けた画家と言えるでしょう。

型を知り、 型を破る。

清之は卓越した写実描写が評価され、細密な風景画で院展にデビューしますが、まもなく西洋絵画の刺激を受けて構成的な画面で仏教建造物やモダン都市の様相を描き、画壇に新風を吹き込みました。しかしその好評価にも安住せず、ユーモアとアイロニーに富んだ人物像や、自然の造形をモチーフにした抽象表現など、日本画の枠に留まらない多彩な作品を残しました。型を知りながら、一点ごとに未知に挑む「試作精神」は、清之の画家としての生き様そのものと言えます。

院展の重鎮として存在感を示した中島清之。一定の評価を得た画家にとって、画風を次々と変えていくことは、とても勇気の要ることでした。

院展の重鎮として存在感を示した中島清之。一定の評価を得た画家にとって、画風を次々と変えていくことは、とても勇気の要ることでした。

先達としての 清之

中島千波の父

中島清之の芸術への情熱は、子息たちへも受け継がれました。長男は美術家の中島けいきょう、次男は美術評論家の日夏露彦^{ひなつゆひこ}、三男は、「花の画家」として知られる日本画家・中島千波です。父と同じ芸術の道を進んだ子息らにとって、いつもみずみずしい感性と探究心にあふれた清之は、「師」というよりも、互いに養分を吸収し、刺激し合う存在であったといいます。

千波が語る“父・清之”

「[僕が] 学生から絵描きとしては
よちよち歩きにすぎない二、三十代の頃だから
技術的には大したことはないんだけど、
それでも [表現方法の] 影響というのは
相当あったんじゃないかな。
[父にとって] 子供の若さを精力剤として
新しいことをやろうということはあったと思う。」

(中島千波氏談、「息子が語る中島清之論」『三彩』1993年3月号より)

片岡球子の師

中島清之を生涯の師として慕ったのが、6歳年下の片岡球子です。北海道から上京し、当時帝展に出品し続けるも落選する球子は、教師の職を得た横浜で清之と出会い、院展出品を目指すようになりました。球子は後に、「展覧会の当落など気にせず、好きな絵を追求すれば良いじゃないか」という清之の言葉に、目から鱗が落ちるような思いがした、と語っています。二人は1952 (昭和27) 年に同時に院展の同人となり、その交友は清之の最期まで続きました。



清之が描いたスケッチ「片岡先生」1952 (昭和27) 年

PRESS RELEASE

ココが「おもしろい」！ 清之作品

50枚以上のスケッチ。
でも本当は存在しない風景。

西洋文化の発信地として関東大震災後に発展した銀座の街を、白描画を思わせる端正な線にとらえた作品。実はこの作品、50枚以上に及ぶ銀座の街のスケッチを元に、実際は離れていた建物を画面上で組み合わせています。つまり清之は、単に最先端の街の風景を写し取ろうとしたのではなく、街をコラージュするようにスケッチを再構成し、緻密で色彩豊かな絵画世界を創り出そうとしているのです。

《銀座B》という対の作品もあり、モボ・モガが闊歩した戦前の銀座の街の様子を伝える、貴重な記録ともなっています。



《銀座A》1936（昭和11）年 横浜美術館蔵（中島清之氏寄贈）

見る人の意表をつくモチーフと画面作り。
伝説の歌姫を清之が描くと…。

名曲「喝采」を熱唱するちあきなおみを描いたこの作品は、流行歌手を日本画のモチーフにした新奇さで、当時批評家たちを驚かせました。彼女の特徴的な顔立ちに魅了され、テレビに映る姿をスケッチするだけでは飽き足らず、歌謡番組の収録に実際に足を運び、作品を完成させました。箔を用いてシルエットで表した楽団員の表現や、ちあきの圧倒的な存在感を伝える色彩と構図には、それまでの実験と試行錯誤の延長線上にある、慎重な工夫が施されています。当時の週刊誌には、「《喝采》を院展に出品した74歳の老画伯」と大きく紹介され、ついにはテレビのワイドショーに出演してちあきとの共演を果たすなど、話題になりました。



《喝采》1973（昭和48）年 横浜美術館蔵（中島清之氏寄贈）

一見すると抽象絵画。しかし、そこに潜むのは、徹底した写実の眼。

卓越した線と箔使いで複雑な竹の葉の重なりを描き分けながら、オールオーバー※の抽象絵画を思わせる大画面に構成した晩年の代表作《緑扇》は、「伝統と現代の統合」を目指した清之芸術の、一つの頂点を示す作品です。葉の隙間から漏れる光の揺らめき、そして葉の陰を表すために、金、銀、プラチナ箔を見事に使い分け、伝統的な^{きりかね}戳金技法のように丹念に貼りこんでいます。二十代の頃から半世紀に渡って構想を温め、各地の竹藪の観察と写生を続けてきたことが、清之の日記やスケッチブックに記されています。

※ 1940年代後半にアメリカで生まれた抽象表現主義の特徴である、画面全体を均質な色彩や線で一面に覆った表現。



《緑扇》1975（昭和50）年 横浜美術館蔵

展覧会の構成

第1章 青年期の研鑽－古典との出会い

小学校の頃から教師に頼まれて東大寺の紋様集などを模写していた清之は、16歳で画家を目指して生まれ故郷の京都を離れ、叔父を頼りに横浜に出てきました。会社勤めをしながら、伝統的な古画の模写に励み、また「スケッチ魔」と言われるほど寸暇を惜しんで屋内外でのスケッチを行い、写実的な描写力を獲得していきました。25歳で院展に初入選し、^{しもむらかんざん やすだ ゆきひこ まえだ}下村観山や安田靉彦、^{せいそん}前田青邨らの知遇を得ると、院展の本流である古典研究に根ざしつつ、次第に自らの感性を活かした装飾的な画面作りを展開していきます。やがて、垂直と水平の線、あるいは円と直線による幾何学的な構成への関心を示すようになり、^{くり}《庫裏》や《花に寄る猫》といった大胆な構図の作品に結実させます。



《庫裏》1930（昭和5）年 横浜美術館蔵

京都に生まれた清之にとって、古建築や仏像が持つ造形美は、格別の魅力を持つものであった。寺院の内部を描いてみたかった清之は、ある僧侶との出会いをきっかけに松島の瑞巖寺に参禅する機会を得て、僧侶たちの居住空間である庫裡を描いた。垂直・水平の線を軸にした簡潔で力強い造形感覚は、この後の清之の作品にも引き継がれた。

第2章 戦中から戦後へ－色彩と構図の洗練

清之は1930（昭和5）年に31歳で妻・三代子と結婚します。翌年には長女が生まれ、生活は充実を増しますが、この年に満州事変が起き、さらに翌年には五・一五事件が勃発し、世の中は戦争への道を歩み始めていました。

1938（昭和13）年、陸軍慰問使として中国に赴いた清之は、兵士たちの似顔絵を描くかわら、行く先々の街をスケッチしました。そして翌年再び中国を訪ね、当時の風俗を活写した^{こうがい}《黄街》七部作を描きます。続いて、春日大社の祭礼を描いた《おん祭》七部作を発表し、これらの作品によって、気品ある色彩と洗練された構図の中に、ユーモアと情感を湛えた人物を描き出す表現に到達します。

1944（昭和19）年、清之は戦火を逃れ、家族とともに長野県の小布施村に疎開します。そして横浜に戻るまでの3年間、雪国の暮らしや山々に囲まれた風景を、数多く描き残しました。中央画壇から離れていることへの焦燥感に駆られながらも、「温かい人情に触れながら、

美しく、かつ厳しい自然に包まれた信州での3年間は、その後の私の画風に、とても良い影響をもたらしたこともまた事実」と、清之は語っています。

終戦から2年を経て横浜に戻った清之は、社会や価値観の急速な変化に大きな戸惑いを感じていました。「世相の急旋回」への反発を感じながら、自分らしい主題を模索し、そして辿りついたのが、1950（昭和25）年の^{ほごえ}《方広会の夜》でした。崇高さを感じさせるその画面は、戦後の混迷を脱して新しい時代の芸術を創出しようとする清之自身の、静かで厳しい覚悟を象徴するものでもありました。



《方広会の夜》1950（昭和25）年 横浜美術館蔵（山口久像氏寄贈）

東大寺法華堂で行われる、僧侶の学識試験をテーマにした作品。講台に座しているはずの僧の姿はあえて描かれず、荘厳にして緊張感のある空間が構築されている。



《おん祭 四、馬長稚児》（七部作のうち）1942（昭和17）年 おぶせミュージアム・中島千波館蔵

PRESS RELEASE

第3章 円熟期の画業－伝統と現代の統合への、たゆみなき攻めの時代

《方広会の夜》によって高い評価を得た清之は、同じ作品傾向にとどまることはなく、国内外の美術の最新動向を敏感に察知しながら、次々と新しい手法に挑戦していきました。1960（昭和35）年の《顔》は、アンフォルメル絵画に触発された鮮烈な赤の色調と重厚な絵肌によって、大画面に仏の顔だけを大きく捉えたものです。幼少期に天平文化の美に出会った清之にとって、仏教芸術は自身の原点とも言えるもので、仏像や古刹をテーマにした作品は、戦後も繰り返し描かれます。

また清之は同時期に、溪流や山肌などの自然の形象を、抽象的に捉えた作品に取り組むようになります。さらにモチーフは、伝統芸能から人気歌手、家族や友人の肖像、庭の花木、好んで旅をした瀬戸内海や富士山の風景など、実に多岐に渡りました。とりわけ、晩年に描いた人物像は、時に飄々としたユーモアやアイロニーに富み、清之生得の、鋭くも温かい人間観察力を伝えています。

清之の創造意欲は、80歳を目前にしても尚、衰えることはありませんでした。78歳で着手した三溪園臨春閣の襖絵^{さんけいえんりんしゅんかく}では、若い頃から傾倒した琳派研究の成果を発揮し、写実と装飾性を両立させたダイナミックな画面を作り上げました。モチーフと構成は各室ごとに大きく変化に富み、五室五様に画家の渾身の力が漲り、観る者を圧倒します。まさに70年間の画業の集大成と呼ぶにふさわしい作品です。



《梅図（三溪園臨春閣襖絵）》

1978（昭和53）年 三溪園蔵 展示期間：12/4～1/11

横浜の名勝・三溪園臨春閣®の襖絵は、清之の代表作の一つ。探幽をはじめとする狩野派による障壁画保存のため、別棟を含む全11部屋の替え襖の制作が清之に依頼され、病に伏すまでに第5室までを完成させた。本作は、第2室のための作。伝統的なたらし込みの技法で描いた梅の古木を、画面全体に伸びやかに配す。アトリエ近くの友人宅の庭の梅を描いたというが、下村観山がかつて《弱法師》に描いた三溪園の「臥龍梅」が、おそらくは意識にあったことだろう。会期中、第1室から第4室の襖絵を展示（会期中展示替えあり）。

※臨春閣は、原三溪が同園に移築した古建築の一つ（重要文化財指定）。現在は狩野派のオリジナルを複製した障壁画が設置され、清之の替え襖も保存のため別置されています。

お得な情報

11月3日（火・祝）は
観覧無料！

展覧会初日の11月3日（火・祝）の文化の日は、横浜美術館の誕生日！
どなたでも無料で展覧会をご覧ください。

12月23日（水・祝）は
ポストカードプレゼント！

12月23日（水・祝）にご来館の先着100名様に、来年の干支・猿が描かれた中島清之の作品《和春》のオリジナルポストカードをプレゼント。

三溪園との相互割引

展覧会会期中、横浜・三溪園と相互割引を実施。それぞれ観覧券の提示で100円引になります。この機会にぜひ、中島清之ともゆかりのある名園をお楽しみください。（他の割引との併用はできません）

関連イベント

1. 記念対談「どこがおもしろいのか、清之の画業」

中島清之と間近に接し、作品を長年考察してきたお二人が、清之の人となりや制作エピソードも交えながら、その作品世界を読み解きます。

出演：日夏露彦（美術評論家／清之次男・洋光）^{ひなつゆひこ} × 大矢鞆音（美術評論家・津和野町立安野光雅美術館館長）^{おおやともね}

日時：11月21日（土）14:00～15:30（13:30開場）

会場：レクチャーホール

定員：240名（当日12:00より総合案内で整理券配布）

参加費：無料（整理券が必要）

2. フロアトーク

父・清之と同じく日本画家の道を歩んだ中島千波氏が、清之作品の制作技法や表現についてお話しします。

出演：中島千波（日本画家／清之三男）

日時：12月6日（日）14:00～15:00

会場：企画展ホワイエ

定員：40名（当日12:00より総合案内で整理券配布）

参加費：無料（当日有効の本展観覧券と整理券が必要）

3. 創作ワークショップ

「日本画の絵具で描いてみよう！」

日本画の画材を用いて、ハガキサイズの和紙に絵を描きます。（担当学芸員による展覧会解説付）

講師：荒木愛（日本画家）

日時：11月15日（日）13:00～16:30

会場：横浜美術館市民のアトリエ、中島清之展展示室

対象・定員：12歳以上・16名（抽選）

参加費：3,500円（他日使用可能な観覧券付）

4. 「親子で『中島清之展』をみよう」

日本画の画材や描き方に触れながら、中島清之の作品を親子で鑑賞します。

日時：11月23日（月・祝）10:00～12:00

会場：横浜美術館子どものアトリエ、中島清之展展示室

対象・定員：小学生1～6年生と保護者、
15組（1組3名まで、抽選）

参加費：親子2名で1,000円（おひとり様追加で+500円）
※観覧料含む

5. 夜の美術館でアートクルーズ

閉館後の美術館で、学芸員の解説つきで展覧会をゆったり鑑賞できる人気プログラム。

解説：本展担当学芸員

日時：①11月28日（土）、②12月9日（水）

いずれも19:00～21:00 ※①②は同内容

対象・定員：18歳以上・各回30名（抽選）

参加費：3,000円

6. 学芸員によるギャラリートーク

日時：11月27日、12月11日、12月25日

いずれも金曜日、15:00～15:30

参加費：無料

（事前申込不要／当日有効の本展観覧券が必要）

7. 展覧会・ココがみどころ！

横浜美術館のボランティアが、展覧会の魅力をコンパクトに紹介します。

日時：11月18日（水）以降の毎週水曜日と土曜日

[11月21日（土）、25日（水）を除く]

11:00～11:15、14:00～14:15

参加費：無料（事前申込不要）

横浜発 おもしろい画家 中島清之一 日本画の迷宮

NAKAJIMA Kiyoshi Retrospective:

Exploring the Kaleidoscopic World of an Innovative Nihonga Painter

会期 2015年11月3日(火・祝) — 2016年1月11日(月・祝)

※会期中、一部作品の展示替えあり。

開館時間 10:00~18:00 (入館は17:30まで)

休館日 木曜日、2015年12月29日(火)~2016年1月2日(土)

主催: 横浜美術館 (公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)、神奈川新聞社、tvk (テレビ神奈川)

後援: 横浜市

助成: 公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団

協力: みなとみらい線、横浜ケーブルビジョン、FMヨコハマ、首都高速道路株式会社

チケット

	当日	前売	団体
一般	1,200円	1,000円	1,100円
大学・高校生	800円	700円	700円
中学生	400円	300円	300円
小学生以下	無料	—	—
65歳以上 (要証明書、美術館券売所でのみ対応)	1,100円	—	—

取扱い | 横浜美術館 (前売はミュージアムショップ)
セブン・イレブン店内マルチコピー機「セブンチケット」
スマートフォン・チケット「ティクシー」

※先行ペア券1800円 (1セット2枚、一般のみ) 販売期間: 2015年7月10日(金)~9月23日(水・祝)

※前売券販売期間: 2015年9月25日(金)~11月2日(月)

※団体は有料20名以上 (要事前予約)

※毎週土曜日は、高校生以下無料 (要生徒手帳、学生証)

※障がい者手帳をお持ちの方と介護の方 (1名) は無料

※2015年11月3日(火・祝) は無料

※本展チケットでご観覧当日に限り、横浜美術館コレクション展もご覧いただけます

※その他の割引料金については別途、お問合せください

横浜美術館

〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい 3-4-1

TEL: 045-221-0300 FAX: 045-221-0317

<http://yokohama.art.museum>

プレスリリースお問合せ

横浜美術館 広報担当 (宮野、藤井、窪田)

TEL: 045-221-0319 FAX: 045-221-0317

E-mail: pr-yma@yaf.or.jp